

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2018年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			キリスト教学	研究科	キリスト教学	専攻			
研究代表者 (2019年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号				氏名					
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年			大川 大地		印				
	<input type="checkbox"/> 博士後期課程 2年 17 TH 003W									
指導教員	所属・職名				氏名					
	文学部・教授				廣石 望		印			
自然・人文・社会の別	自然	・	<input checked="" type="checkbox"/> 人文	・	社会	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人	・	共同	名
研究課題	原始キリスト教における悪霊祓い物語の編集史的・社会学的分析—マルコ福音書の悪霊祓い物語分析を中心に—									
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2019年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年				氏名					
	キリスト教学研究科・キリスト教学専攻・博士後期課程2年				大川 大地					
研究期間	2018 年度									
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円									

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、原始キリスト教における悪霊祓い物語を、編集史的・社会学的方法を用いて分析し、悪霊祓い物語の持つ「神学思想」と「社会コンテクスト」との関連を明らかにすることを目的とする。

その際、①中心的な分析対象は、新約聖書の中からマルコ福音書に限定され、②編集史と社会史の方法論を中心に、歴史的・文献学的な分析を基本課題としつつも、③現代社会を解明する為に開発された社会学理論を「発見的」に分析に応用することが試みられる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 悪霊祓い物語 } { マルコ福音書 } { 社会学的分析 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究資金を用いた研究成果は 2018 年度中に複数の論文発表・投稿 (2019 年 4 月現在未刊行のものも含む) ならびに学会発表のかたちで公表された。以下、複数の聖書箇所に対する研究成果のそれぞれの概要を記す。

①マルコ福音書 5, 1-20 について (研究成果①- (1)、(2) に該当)

該当の悪霊祓い物語は、「ゲラサ人の地」におけるイエスの悪霊祓いとその結果としての豚の大量溺死を描くが、悪霊の名は「レギオン」(ローマ軍の意)と記されている。マルコ福音書はおそらくは、紀元 70 年のエルサレム陥落の後に、パレスチナ近辺の南シリアで執筆された書物だと思われ、彼が念頭に置く共同体はユダヤ人と非ユダヤ人の混成教会である。では、「異邦人」の地ゲラサで、「レギオン」とイエスが対峙する物語の成立の背景には、いかなる社会状況が想定されるのだろうか。加えて、この物語には、文面上の問題が見られる。すなわち、至る所に単語や動詞の単数・複数の不一致が確認でき、相互に矛盾するように思われる重複が散見される。このことは、この物語が伝承の段階からマルコ福音書の現行テキストに至るまで、言わば無傷のままでは伝えられてきたものではなく、複雑な伝承過程を経ている、ということ強く示唆する。一体、この物語の背景にはどのような伝承が存在し、どのような過程を経てマルコ福音書の現行の形に至ったのであろうか。伝承はどのような社会状況の中から生み出され、何を意図して伝えられたのだろうか。マルコは何を意図して伝承を「編集」し、その作業はどのような社会状況を背景に持っているのだろうか。「ゲラサのレギオン」物語をめぐる以上のような疑問に、伝承史・社会史の方法論を用いることによって、マルコ福音書の悪霊祓い物語に表明された福音書記者マルコ(ならびにその共同体)と彼が用いた伝承双方の「神学思想」と「社会コンテキスト」の関連を明らかにした。すなわち、①伝承史的方法を用いた考察から、「ゲラサのレギオン」物語を複数の伝承層から成る形成物として把握し、この物語に三段階の発展過程(「伝承の最古層」、「伝承の二次的発展」、「マルコの編集」)があることを示した。②社会史と社会理論に基づいた考察から、それぞれの段階に固有の社会状況があることを明らかにした。伝承の最古層はユダヤ戦争以前に、悪霊憑きの社会復帰によって都市共同体の社会秩序の回復を象徴する物語として生み出されたものであり、二次的発展の段階では、ユダヤ戦争勃発直後のユダヤ人と異邦人の対立を背景に、ユダヤ人キリスト教徒によって悪霊憑きを異邦人として蔑視するための文言が付け加えられ、ユダヤ戦争終結後の社会状況の中で最終的に物語を編集したマルコは、物語をイエスと「レギオン」との対決とすることで、イエスの圧倒的な力を前面に押し出し、その圧倒的な力によって自らの属するユダヤ人と異邦人の混成教会のアイデンティティを構築しようと試みている。上記の考察を踏まえた上で、結論として、マルコ福音書における悪霊祓い物語が、固有の社会コンテキストに規定されて生み出されたものであり、それと同時に社会コンテキストに何らかの変革を促す機能を持っていたものであることを指摘した。

②マルコ福音書 9, 14-29 について (研究成果①- (4)、④-(1)を参照)

同箇所記された悪霊祓い物語は、イエスの弟子たちが悪霊祓いに失敗し、そのことによって律法学者達との論争が始まったという記述で幕を開ける。編集史的視点からの分析によって、弟子たちの失敗という動機は、いわゆる史的イエスとその実際の弟子たちの出来事を記録したものではなく、イエスの死後 40 年後を生きるマルコ共同体の状況を顕著に反映したものであることを明らかにした。物語によれば、悪霊祓いを成功させたイエスは、弟子たちに向かい「信じる者には全てが可能だ」、「祈りによらなければこの種のものはいくつかは追いつくことができない」とのアドバイスを語ったという。この 2 つの発言は神への信仰を説く発言として神学的に解釈されてきたが、社会的逸脱行動に関する「スティグマ」理論や「自己スティグマ」理論等の社会学概念を応用すると、上記の発言の全く違った側面が見えてくる。すなわち、悪霊祓いの失敗に対して共同体には「無力」のスティグマが外部から刻印されていたことが予想されるが、上記のイエスの発言は、悪霊祓いという奇跡行為がそもそも人間の能力(カリスマ)によるものではないことを説くことで、共同体に刻印されたスティグマ

研究成果の概要 つづき

を無効化するように機能する。このように、原始キリスト教の悪霊祓い物語は、それを語るものたちの社会的・政治的状況に深く規定されているのと同時に、その状況を変革する「戦略性」を持ったものである。

③ガラテヤ書 4, 12-15、フィリピ書 2, 25-30 について (研究成果①-(3)、④-(2)を参照)

パウロ書簡中の上記の箇所は、悪霊祓い物語ではない。しかし、とりわけ病ないし障がいを得る中での教会設立時の様子を語るガラテヤ書の箇所に、病気や障がいを悪霊の憑依によるものとする古代地中海世界の文化フォーマットが前提とされていることは多くの研究者によって指摘されている。上記②でマルコ福音書の分析に用いた「スティグマ」理論や「自己スティグマ」理論等の社会学概念を応用すると、自身の病気や障がいのスティグマ化に対するパウロの抵抗の戦略としてこの箇所を理解することが可能になる。両書の該当箇所において、パウロとエパフロデトスは「弱さ」すなわち何らかの病気もしくは障がいのゆえに、現にスティグマ化されている、あるいは自身に対するスティグマ化が容易に予想される状況にあった。このスティグマ化の脅威/危険に対してパウロは「自己スティグマ化」の戦略で対抗する。すなわち、両箇所においてパウロは、(1) 手紙の相手がすでに知っているはずの「弱さ」にわざわざ言及し、(2) その「弱さ」に肯定的価値を付与することによってスティグマ化を無効化する。そのさい、弱さへの肯定的価値の付与は (3) キリストとのパラレルによって成立する。このパラレルに支えられた戦略の目標は、(4) 「十字架につけられたキリスト」において示された神による「逆転」を、自身やエパフロデトスの置かれた状況にも成立させることにある。従って、(5) パウロの「自己スティグマ化」の戦略は、その「十字架の神学」と密接に関連している。

以上の研究が明らかにしたように、原始キリスト教の悪霊祓い物語は、それぞれが独自の社会コンテクストに規定されつつ、その社会コンテクストを神学思想によって何らかのかたちで変更するために機能するものである。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- (1) 大川大地「ゲラサのレギオン—マルコ福音書 5 章 1-20 節の伝承史的・社会史的分析と考察—」、日本聖書学研究所『聖書学論集』第 49 号 (2018 年)、49-81 頁
- (2) Daichi OKAWA, “The Legion in Gerasa and Jesus’ Overwhelming Power: Socio-political Context and Theological Strategy of Mark 5:1-20,” *Annual of the Japanese Biblical Institute XLII/XLIII*, 2018, pp. 53-70
- (3) 大川大地「パウロにおける自己スティグマ化の戦略—ガラテヤ書 4 章 12-15 節、フィリピ書 2 章 25-30 節によせて—」(日本新約学会編の青野太潮先生献呈論文集に応募済。2019 年 4 月現在査読中)
- (4) 大川大地「マルコ福音書 9 章 14-29 節におけるカリスマとスティグマ」(日本新約学会『新約学研究』第 49 号に掲載予定。編集へ原稿を送付済)

② 図書

(翻訳担当) W. Stegemann/B. J. Malina/G.Theißen (eds.), *Jesus in neuen Kontexten*, Stuttgart, 2002 の中の S. Guijarro, “Die politische Wirkung der Exorzismen Jesu: Gesellschaftliche Reaktionen und Verteidigungsstrategien in der Beelzebul-Kontroverse” pp. 64-74 の翻訳を担当 (翻訳原稿は出版社に送付済み。訳書は 2019 年度中に日本キリスト教団出版局から発行予定)

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

該当なし

④ その他 (学会発表等)

- (1) 「マルコ福音書 9 章 14-29 節におけるカリスマとスティグマ」。於：日本新約学会第 58 回学術大会、2018 年 9 月 7 日、敬和学園大学
- (2) 「パウロにおける自己スティグマ化の戦略—ガラテヤ書 4 章 12-15 節、フィリピ書 2 章 25-30 節によせて—」。於：日本キリスト教団鶴見教会主日礼拝、2019 年 1 月 13 日、日本キリスト教団鶴見教会
- (3) 「マルコ福音書における恐れとそれへの対処—「海の奇跡」(4,35-41; 6,45-52)を中心に」。於：日本聖書学研究所 2018 年度 1 月度例会、2019 年 1 月 21 日、日本聖書神学校